

理学療法之最も主要なアプローチである「運動療法」に関しては、それぞれの疾患・障害に対して多様な内容が提案されている。しかし、臨床的日常的に行われている運動療法を基礎的に検討する試みはなお十分ではない。どのような手技、方法のどの部分が何に効果的かを問うことは、クライアントへの説明、科学的効果の証明などの点で大変重要である。今回筋力低下、関節可動域障害、運動麻痺、バランス障害、起居移動動作障害という重要で不可欠な障害に対して一般的に行われている方法を再検討しその基礎的理解を深めてみたい。

■筋力低下に対する運動療法の基礎（市橋則明，他論文）

筋力低下に対する運動療法の基礎的知識として、理学療法の分野で日常的に行われている筋力トレーニングを筋の活動量の視点から検討した。肢位、関節角度、重心の位置などにより筋活動が変化することを熟知し、個々の患者に最も効果的なトレーニング方法を処方する必要がある。また、膝関節への負荷が少ないとされるペダリングトレーニングの有効性について述べた。さらに、近年注目されている高齢者や中枢性疾患に対する筋力トレーニング効果に関して文献的にレビューした。

■関節可動域障害に対する運動療法の基礎（佐々木伸一，他論文）

下肢の関節可動域障害は、進行することが多いため、関節を動かすことで生じるリスクと関節の不働により生じるリスクを考慮しながら運動療法を進める必要がある。股関節、膝関節、足関節拘縮は、それぞれ ADL に及ぼす影響が異なること、可動域障害に対する運動療法は、目的により多くの方法があること、患者および理学療法士への負担を軽減するための原則と手技があることについて述べた。

■中枢神経運動麻痺に対する運動療法の基礎（潮見泰藏論文）

中枢神経疾患に対する運動療法の中でも、ファシリテーションテクニックは随意運動を促すための有力な手段の一つと考えられてきた。ファシリテーションテクニックにはいくつかのアプローチの方法があるが、その最大の効果を期待するためには、それぞれのもつ適用と限界について知っておく必要がある。本稿では、随意運動の回復のための治療手技に関する基本的な考え方、ならびにその具体的アプローチの例についても述べた。

■バランス障害に対する運動療法の基礎（藤澤宏幸論文）

バランスに関する理論的な変遷（反射階層理論、システム理論）を踏まえ、臨床においてバランスを評価し治療する際の基本的な考え方について述べた。また、臨床で広く応用できる事項として、安定に関する運動力学、運動学習を取り上げ、さらに介入方法について検討した。

■起居移動動作障害に対する運動療法の基礎（冨田昌夫論文）

動作分析に基づいた運動療法は、姿勢や動作パターンを正常化することが目的となり、患者が何を感じ、何に困っているのかという問題を反映できる余地が少なく、慢性的に重い障害を残す患者には十分な治療効果を得ることができなかった。患者が障害を残したまま環境に適応できるように学習するのが起居移動動作障害に対する運動療法の基礎であると考え、障害のある現実の身体で自分を知り、自分と支持面・対象と自分の関係がわかること、つまり健常なときとは違った定位ができることの重要性を述べ、獲得のための具体的戦術として知覚システム間のキャリブレーションという考え方を提案した。